

1 外耳疾患

I. 外耳道炎

1 疾患の概説

外耳道は外側 1/3 の軟骨部外耳道と内側 2/3 の骨部外耳道に分けられる。軟骨部外耳道は皮下組織が厚く、耳毛や皮脂腺・耳垢腺が存在する。骨部外耳道は皮下組織が薄く、毛包や腺はなく直下は骨となる。軟骨部外耳道の毛包や腺に細菌感染をきたせば、急性限局性外耳道炎（耳せつ）となる。骨部外耳道の外的刺激により上皮剥離、びらんをきたすと、びまん性外耳道炎を引き起こす。過度な耳掃除などによって外耳道の損傷をきたし、損傷した部位への細菌感染が原因となる。限局性外耳道炎の起炎菌としては黄色ブドウ球菌が多い。びまん性外耳道炎の起炎菌としては、黄色ブドウ球菌の他、緑膿菌や、真菌の混合感染、アレルギーの関与もあると考えられている。

急性限局性外耳道炎の症状としては、耳痛、耳介牽引痛、外耳道の圧痛、開口時痛などがあり、外耳道の腫脹をきたすと耳閉感、難聴をきたす。びまん性外耳道炎の症状としては搔痒感がある。不適切な処置などにより炎症が悪化すると、耳痛、滲出液の漏出、痲疲の貯留などをきたし、長期には外耳道狭窄などを引き起こす。

2 治療法

• 急性限局性外耳道炎（耳せつ）

外耳道の清掃：外耳道に貯留した膿汁や痲疲を丁寧に除去する。

抗生剤点耳薬：発赤・腫脹が強く、または既に自壊している場合には抗生剤含有の軟膏や点耳薬を用いる。

抗生剤内服：強い痛みや発熱を伴う場合、炎症の強さ、範囲の広がりにより抗生剤の内服を用いる。

消炎鎮痛薬：強い痛みに対しては消炎鎮痛薬を使用する。

高齢者および糖尿病を有する患者などで難治性の場合には、細菌培養

検査を施行し菌の同定を行い，感受性のある抗生剤を選択する。

• **びまん性外耳道炎**

耳掃除を控えて外耳道への刺激を軽減：外耳道に対する過度な耳掃除がびまん性外耳道炎の主要な原因の一つと考えられ，耳掃除を控えるように指導する。痒みの強い症例では抗ヒスタミン薬の内服を行う。

局所の処置：違和感，搔痒感の改善目的に適度な清掃を行い，ステロイド含有軟膏の塗布を行う。

感染への対処：感染の防御目的に，もしくは感染の兆候が見られる場合には，抗生剤含有の点耳薬，または真菌の関与が認められる場合には抗真菌薬軟膏を用いる。

3 処方例

• **急性限局性外耳道炎（耳せつ）**

• **抗生剤軟膏**

ゲンタマイシン硫酸塩軟膏（ゲンタシン軟膏）

1日2回塗布

• **抗生剤点耳薬**

オフロキサシン点耳薬（タリビッド耳科用液）

1回数～10滴 1日2回点耳

あるいは，

セフメノキシム（バストロン耳鼻科用）

1回数～10滴 1日2回点耳

• **抗生剤内服**

シクラシリン（バストシリン）

1回250～500mg 1日3～4回内服

あるいは，

セフカベンピボキシル（フロモックス）

1回100mg 1日3回食後内服

- ・消炎鎮痛薬

ロキソプロフェンナトリウム（ロキソニン）
1回 60 mg 頓用

あるいは、

イブプロフェン（ブルフェン） 1回 200 mg 頓用

- ・びまん性外耳道炎

- ・抗ヒスタミン薬

ロラタジン（クラリチン） 1日 1回 10 mg 内服

あるいは、

フェキソフェナジン（アレグラ）
1回 60 mg 1日 2回内服

- ・ステロイド軟膏

ベタメタゾン吉草酸エステル軟膏（リンデロンVG軟膏）
1日 2回塗布

- ・ステロイド点耳薬

ベタメタゾンリン酸エステルナトリウム（リンデロン点眼・点耳・点鼻液）
1回 1～2滴 1日 2回点耳

- ・抗生剤点耳薬

オフロキサシン点耳薬（タリビッド耳科用液）
1回数～10滴 1日 2回点耳

あるいは、

セフメノキシム（ベストロン耳鼻科用）
1回数～10滴 1日 2回点耳

- ・抗真菌薬軟膏

ビホナゾール（マイコスポール） 1日 1回塗布

あるいは、

ミコナゾール（フロリードDクリーム） 1日 2～3回塗布

4 注意点

抗生剤軟膏はアミノグリコシド系の抗生剤を含有していることが多く、アミノグリコシド系の抗生剤には耳毒性があるため、鼓膜穿孔のある患者において使用する場合は注意する。漫然としたステロイド軟膏、ステロイド点耳薬、抗生剤点耳薬の使用は菌交代症や外耳道真菌症をきたす可能性がある。

II. 外耳道真菌症

1 疾患の概説

外耳道真菌症は高温多湿の日本に多い疾患である。骨部外耳道は、軟骨部外耳道のように耳垢腺がないため酸性度が低く真菌の感染は起こりやすいと考えられている。

外耳道内は高温・多湿な環境にあり真菌の繁殖には条件が良い部位である。さらに慢性中耳炎や外耳炎により滲出液が存在すると、多湿が助長される。長期の外耳道への局所抗生剤の使用は菌交代現象をきたし、点耳や軟膏などの局所ステロイド薬は局所の免疫力の低下をきたす可能性がある。また糖尿病など感染に対し免疫力が低下している状態など、真菌の繁殖にとって好条件となる。真菌の種類はアスペルギルス属が最も多い。

症状としては耳の搔痒感、耳痛、耳漏、耳閉感、難聴、膜様物の貯留などである。処置用顕微鏡にて真菌の胞子や菌糸が見られれば診断可能であるが、処置用顕微鏡で見られない場合には、外耳道内貯留物を採取し検鏡下に菌体を確認するか、真菌培養による検出が確定診断となる。

2 治療法

耳掃除の禁止: 外耳道への刺激を減らし悪化を防ぐために、耳掃除が習慣となっていれば、それを控えるように指導する。

局所の清掃: 外耳道内に貯留した膿性の分泌物や、貯留した膜様物を丁寧に除去することが重要である。局所の清掃は頻回に行う。

塩化メチルロザニリン（ピオクタニン）塗布：局所の清掃を行った後、真菌および細菌繁殖を抑制する目的でピオクタニンを塗布する。

抗真菌薬軟膏：真菌の排除を目的に抗真菌薬軟膏を塗布する。

抗ヒスタミン薬，局所ステロイド薬：痒みの強い症例では抗ヒスタミン薬やステロイド軟膏も状態に応じて併用し，搔痒感の軽減目的に使用する。

抗真菌薬内服：上記の処置にて改善しない難治例，または鼓膜穿孔があり中耳に波及している場合は，抗真菌薬の内服による治療も有効である。

3 処方例

・抗真菌薬軟膏

ルリコナゾール（ルリコンクリーム） 1日1回塗布

あるいは，

テルビナフィン塩酸塩（ラミシールクリーム）

1日1回塗布

・抗ヒスタミン薬

オロパタジン（アレロック） 1回5mg 1日2回内服

あるいは，

レボセチリジン（ザイザル） 1日1回5mg 就寝前内服

・抗真菌薬内服

イトラコナゾール（イトリゾール）

1日1回50～100mg 食直後内服

4 注意点

内服用の抗真菌薬には，禁忌疾患，併用禁忌薬剤などが多くあること，また全身性の副作用の発現に対し注意する必要がある。アゾール系抗真菌薬であるイトラコナゾール（イトリゾール）はアスペルギルスを含む広い菌株に有効であるが，トリアゾラム（ハルシ